

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	佐々木 亮
論文題目	<i>Vādanyāya</i> におけるダルマキールティの討論思想の研究

審査要旨

本論文は、七世紀の仏教論理学派の大成者であるダルマキールティの著書 *Vādanyāya* (= VN) における「敗北の条件」(nigrahasthāna) や「討論」(vāda) といった概念の解析を中心として、VN の包括的な論理構造を解明し、インド討論思想史におけるその位置付けを明らかにしたものである。

本論文第一部「*Vādanyāya* 注解研究」では、文献学的手法に基づく VN の解読研究を行い、その抄訳と解説を提示する。VN はその内容構成上、前半部と後半部に分けられる。前半部では、ダルマキールティ自身が提示する敗北の条件の新たな定義を論じる(第一章で検討)。後半部では、*Nyāyabhāṣya* (= NBh) と *Nyāyavārttika* (= NV) の説を主たる敵対言説として、ニヤーヤ学派が定める二十二項目の敗北の条件の各項を批判的に検討する(第二章で検討)。

第一章は、VN 前半部の抄訳とその内容の分析から構成される。前半部では、ダルマキールティは「敗北の条件」を、立論者にとっての敗北の条件である *asādhānāṅgavacana* と、対論者にとっての敗北の条件である *adoṣodbhāvana* とに区分し、更に、前者に対しては五通りの語義解釈を、後者に対しては二通りの語義解釈を提示している。これらの諸解釈は、仏教論理学の諸概念を活用して規定されている。本章では、これら諸概念を丁寧に説明しつつ、二種の敗北の条件の内容を明快に解析している。また、その解析を通して、ダルマキールティが、従来のニヤーヤ学派の「論諍」(*jalpa*) や「論詰」(*vitandā*) といった諸概念と対比させる仕方で、「善人の討論」(*satām vādah*) という新しい討論概念を提起している、という点を明らかにしている。加えて、VN における討論の勝敗条件は、立論者と対論者の両者が互いに正しい証明を明示する能力と本当の過失を説示する能力を否定し合うことに依拠して決まるものである、という点を指摘している。

第二章は、VN 後半部の抄訳とその内容の分析から構成される。分析の結果、ニヤーヤ学派が提示する二十二項目の敗北の条件に対して、ダルマキールティはその大部分を正しい敗北の条件として認めないこと、一方、*arthāntara*, *nyūna*, *adhika*, *apratibhā*, *hetvābhāsa* の五項目については真正の敗北の条件として認容している、という点を明示している。

本論文第二部「*Vādanyāya* の思想史的意義の解明」では、インド討論思想史上において VN が果たした意義を明らかにする。即ち、第一部で検討した内容をもとに、VN の著述意図を含む包括的な論理構造を明らかにする(第三章で検討)、更に、VN が後代のニヤーヤ学派の諸論師に如何なる影響を与えたのかを解明する(第四章で検討)。

第三章では、VN 前半部と VN 後半部の内容を対照させている。ダルマキールティは VN 後半部においてニヤーヤ学派の示す二十二項目のうちの五項目を正しい敗北の条件であると承認した。このことから五項目は、VN 前半部で検討された *asādhānāṅgavacana* ないし *adoṣodbhāvana* の各解釈のいずれかに対応することが予期される。勿論、ダルマキールティとニヤーヤ学派とは敗北の条件を定義する際に依拠する論理学説が異なるため、両者の見解が細部に至るまで厳密に一致するとは言えない。以上の点を考慮に入れながら、本論文では、ダルマキールティの敗北の条件の定義とニヤーヤ学派の五項目の敗北の条件とが文献的にどのように関係しているのかを分析し、その結果を明示している。更に、VN の敗北の条件の真正性は、VN 前半部において敗北の条件に具体的内実を与えるために仏教論理学説を活用したことによって保証されており、また、体系の十全性は、VN 後半部においてニヤーヤ学派が規定する敗北の条件の細目を自説の内外に漏れなく解消させたことによって確認されている、ということを経験的に解明している。これらは本論文の成果の一つである。

第四章では、主に VN に対する後代のニヤーヤ学派の論師達による応答の仕方を探る。その結果、第一に、ジャヤンタ・バッタが *Nyāyamañjarī* において、*asādhānāṅgavacana* と *adoṣodbhāvana* というダルマキールティの新規概念を *apratipatti* と *vipratipatti* というニヤーヤ学派の伝統的概念に還元しながら、ニヤーヤ学派の敗北の条

件説のうちダルマキールティが正しいと認める見解を換骨奪胎する形で自説に取り入れている、ということを見出している。また、第二に、『方便心論』から *Nyāyabhūṣaṇa* に至るまでの「討論」概念の変遷を明らかにしている。即ち、『方便心論』は「荊棘（茨）」の比喻を用いて造論の目的を説明し、NS がこの「茨」という比喻表現を借用して論諍 (*jalpa*) と論詰 (*viṭaṇḍā*) を定義し、NBh は NS の注釈の際に論諍と論詰の目的を「勝利」と規定した。それに対して VN は論諍と論詰の目的とされている「勝利」の概念を批判し、代わりに、「他者への裨益」 (*parānugraha*) を討論の目的として提示した。この VN でのダルマキールティの説に基づいて、バーサルヴァジュニヤは *Nyāyabhūṣaṇa* において（そして恐らくはヴァーチャスパティ・ミシュラも *Nyāyavārttikatātparyāṭikā* において）論諍・論詰における「勝利」の概念を否定し、「他者への裨益」の概念を採用した。これらの流れを本章では明らかにしている。

以上の研究によって後代のニヤーヤ学派等への影響の全貌が解明されたわけではなく、また、シャーンタラクシタによる VN の注釈書 *Vipaṅcitārthā* のテキスト校訂・解読研究等の重要な研究課題も残されている。しかしながら、本論文によって、インド思想史において VN が果たした意義の大略が解明されたことは学界に大きく寄与するものであり、とりわけ、第三章及び第四章において解明された事柄は、これまでの研究では見出されなかった新たな成果として評価できる。以上により、本論文は博士学位を授与するにふさわしい論文であると判断した。

公開審査会開催日	2014年 12月 19日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	専門分野	氏名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院教授	Dr. phil. (ハンプルク大学)	印度哲学(含仏教学)	岩田 孝
審査委員	早稲田大学文学学術院教授	博士(文学)(早稲田大学)	仏教学	大久保 良峻
審査委員	東洋大学文学部東洋思想文化学科教授	Ph. D. (Banaras Hindu University)	印度哲学(含仏教学)	宮本 久義
審査委員				
審査委員				